
蘇る心境

海谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇る心境

【Nコード】

N5989F

【作者名】

海谷

【あらすじ】

橋本の脳裏で蘇るのは、小学校の時の思い出と一つの事件。その犯人が「僕は悪くない」と言つて、ある人に「君が悪い」と迫る。あの事件の真相は何だったのか。それと同時に、もう一つ蘇る何かがあった。

プロローグ

マンションの前まで歩くと、少年は足を止めて深呼吸をした。マンションは四階まであるように見える。建物の色は黒に近いが、夜なので詳しくわからない。マンションの窓や、周りの住宅の窓から漏れる光しかないので、非常に見にくい。

少年は足を進めようとする。だがその時、身体が少し震えた。緊張したのだ。顔が固まり、右手で着ている服を掴んだ。

諦めてはいけない　そう強く思ったが、緊張は収まらない。ここに僕の人生に傷を与えた人物が住んでいる。今から、その人の所に行つて、その人に謝ってもらうのだ。僕だけが悪いんじゃない、と少年は思っていた。

マンションの出入り口を眺める。少年は、行き場を失つた悲しい思いを吐き出すかのように溜息をついた。だが、実際は悲しみは心の中に溜まったままだ。そして、マンションに背を向けて、歩き始める。足が少し重く、背中も弱々しい。

ここから僕の家は近いから明日行こう、と自分に言い訳をするが、それは逆効果で、少年はまた溜息をついた。しかし、心の中にある闇は無くならない。冷たい風が少年の心にある悲しみや憎しみを増大させていた。

徒歩で十分。少年には近いと感じる。あの人のせいで転校することになってしまったのだ。父親が転勤したくなかつたらしく、別の都道府県に移動はしなかつたが、遠くへ行くことになった。

まさか、向こうが近くに住むようになるとは思わなかつた。マンションの隣にある家に住んでいる友達が「マンションに可愛い女子が来た」と言つて、さらに名字も続けて言つた。その時に、あの人ではないか、と疑い始めた。名前も訊いてみると、少年の予想が当たる結果になった。それと同時に少年の心に隠れた悪意が心を支配

していった。

あの事件で少年は心に深い傷を負った。それが痛むかのように、心臓が強く掴まれるような気分に襲われる。苦しみから解放されたいのに、それを恐れている自分もいるのだ。

しかし、少年はマンションに入ることができない。マンションの周りを回って、部屋の窓を見つめることしかできない。

その時に、部屋の窓から高校生くらいの少女が少年を見つめてきた。少年はそれに気づくと目をそらした。数秒後、部屋の窓に目を向けるが少女は見えず、カーテンだけが見えた。

あの少女、美人だったかもしれない。ということとは、あの入だろうか。だが、今日もマンションの中には入れなかった。冷たい風が着ている服に伝わって、身体を苦しめる。

今日はダメだと思い、異常に気が弱くなる自分を責めながら、自宅に帰ろうと歩き始める。背中を押してくれるような何かがあれば助かるのに、と思うが、そんなことが起こる可能性はゼロに近い。

僕が行動しないといけない　そう強く思っても、それが行動に移されることはなかった。まるで何かにせき止められているかのようだ。

窓から漏れる光から目をそらし、顔を斜め下に向けて、少しだけ照らされた道を見つめながら歩く。少年は何もできない弱い自分を呪い、自己嫌悪の闇に落とされた。

プロローグ（後書き）

お久しぶりです。海谷です。

前作とは違い、現実的なものになってくると思います。しかし、これからどうなっていくのかは僕でもわかりません。

全体の流れは決めてあるし、結末も考えてはいるけど、物語というのは途中から変わってくる場合が多いですからね。それが面白いから、僕は小説を書いているのかもしれない。

頑張って書いていこうと思います。よろしくお願いします。

彼女と再会・一

暇の多い夏休みも半分が過ぎた。高校三年生の橋本は一流の大学へ進学するために、毎日勉強を頑張っている。部活はしていない。

今日も午前十時から勉強を始めていた。問題集に書かれている問題が頭の中に入りにくくなってきた。椅子から立ち上がって時計を見てみると現在の時刻が午前十一時二十分であることがわかった。十二時になったらコンビニに行つて、何か昼食でも買ってこよう、と考える。父は仕事で、母は午前九時に家を出て行ったから、食事は自分で何とかしないとイケないし。

母は「友達と楽しんできて」と言つて、どこかへ行った。買い物や食事を友達と会話しながら楽しんでいるのだろう。俺も明日か明後日に友達でも誘つてゲームセンターでも行こうかな、と橋本は思ったが、友達も勉強を頑張っているので断られる可能性もある。一緒に勉強と言えば大丈夫かもしれないが。

そう思つてから、休憩ということで漫画を読んだ。とても面白く吸い込まれるような感覚だ。橋本の脳裏は漫画に支配されてしまつた。

気づけば、午後十二時三十分の数秒前になっていた。漫画は恐ろしい、と思う。橋本は何か別のことをしていると、勉強することを忘れてしまう性格の持ち主だ。この不利な性格が無ければ、テストの平均点も五点くらいは上がっていたかもしれない。

遅れを取り戻さないと、と思つて問題集に目を向けるが、鉛筆を持った右手が動かない。そして何だか、腹に違和感がある。これは空腹だ。橋本は左手で腹を押さえる。

……仕方ない。橋本は財布と鍵を持つと、玄関へと向かった。コンビニへ行つて、何か食べ物を買つて食べよう。そうすれば、勉強に集中できると思つた。

靴を履いてから外へ出る。風が気持ち良い。そして鍵をかけた。家の近くに新しいコンビニが一週間前にできたので、そこへ歩いていくことにした。

一分で新しいコンビニに到着し、橋本は足を止めずにそのまま入った。このコンビニとは長い付き合いになりそうだ。

店内の床は自ら輝いているように綺麗だった。その床の上を橋本は歩いて、サンドイッチを二つとお茶を一本持つと、レジへと向かう。雑誌にも自然と目が向いてしまいが、時間に余裕が無い。

商品を置くと、店員の黒い髪の女性は数秒程度で、「合計六百五十円になります」

と言ってきた。行動が早いな、と感心する。こういう仕事に慣れているのだろう。

橋本は財布から百円玉を七枚、合計七百円を右手で取り出すと、レジに置いた。

そして、店員に目を向ける。すると、その店員は少し驚いたような表情を橋本に見せていた。少し大きく開いている黒い瞳が綺麗だった。一体、どうしたのだろうか。その店員は可愛かったので見つめられることは嫌ではなかったのだが。というより、少し興奮した。店員は信じられないような口調で訊いた。

「……橋本？」

それが耳に入った瞬間、橋本の口が「えっ」と言うように開く。

何故だ。何故、この女子が俺の名前を知っているのだろうか。

高校の同級生でもないし、中学校の同級生でもない。

「あ、ああ」

橋本は驚いたように答えた。脳裏に疑問符が浮かぶ。

「あー、そうだったんだ」

急に彼女は、何かが吹っ飛んだように明るくなった。それとは逆に、橋本は理解できていない。少し大きな声で訊いた。

「え、え、何で知ってるの？」

「わからないの？ 私は中川よ」

と笑みを浮かべて答えた。

中川。その言葉に覚えが少しだけある。小学三年か四年か、詳しくは覚えていないが、同じクラスにいた。恋人のような関係だったと自称していた、と思い出す。名前は詩織しおりだ。橋本の脳裏に小学生の時の出来事が次々と蘇る。

彼女の肌が白くて、凹凸が一つも無いのは昔から同じだった。そのせいか、彼女は高校三年生よりも下に見える。会ってみたくないな、と思ったこともあったが、本当に再会できるとは思わなかった。橋本と彼女が通った中学校は違ったので、それ以来会うことは無かった。だから、久しぶりに出会った彼女を見て驚いた。

大人に近づいたな、と心の中で思わず呟いた。

彼女と再会・二

「ああ、小学校のとき、同級生だったよな」

「そう、思い出してくれて良かったー」

明るい口調で中川は言った。表情も明るい。そして続ける。

「まあ、顔は変わるよね。顔じゃなくて、右手の裏を見て、この人が橋本だ、ってわかったし」

そう言われて、橋本は反射的に右手の裏を見た。五センチくらいの傷が縦にある。これは小学四年の時に公園で友達と鬼ごっこなどをして遊んでいて、その時に木の枝に当たって、できてしまった傷だ。思っていたより傷が深かったので完全に治すことは無理だった。過去の記憶を思い出しながら会話していると、後ろに並んでいた一人の小学生の男子が「早くー」と無邪気な声で橋本と中川に言った。

「あ、ごめんね」

その男子に優しく言うと、次に橋本は顔を中川に向けてから言った。

「頑張れよ」

そして、二つのサンドイッチと一本のお茶が入っている袋を左手で持つと、コンビニから出ようと歩く。だが、そのときに中川が「待って」と呼び止める。

橋本が、何だろうと思いつつ振り返ると、中川が訊いた。

「今日の夜七時に来てくれる？」

その発言の意味は、そのときにまた会話をしようということだろうか。断る理由が無いので「良いよ」と返事した。それで終わりかと思っただが、中川は橋本の右腕をつかんで引っぱり、何も持っていない右手の上に一枚のコインを乗せた。それは五十円玉だった。

「おつり」

「あ、サンキュ」

おつりを忘れていた。まあ、これくらいなら別に忘れても大丈夫だったのだが。

小学生の男子は珍しいものでも見ているかのような表情をして、二人を見つめている。少し恥ずかしい。橋本はその男子を見ないで買った商品と共にコンビニを出て、自宅へ帰った。

自宅に帰ってから、買ってきたサンドイッチを食べて、お茶を飲み、それが終わると勉強を始めた。頭が活性化しているような気がする。多分、それは思っているだけで本当はいつもと変わっていないと思うが、思っているだけで発揮できる能力が上がるという夢のような言葉を聞いたことがあるので、イメージトレーニングのように「頭が活性化している」と橋本は心中で言い続けた。実際には出していなかったが、口が少しだけ開いていたことに気づいた。もう少しで独り言になってしまふところだった。

そして、時刻は午後四時になった。中川は「七時に来て」と言っていたので、あと三時間もある。しかし、勉強に対する集中力が無くなってきた。問題が頭に入りにくくなり、鉛筆を動かすことが嫌になる。

そのときに橋本は先週買ってきた小説を読みたいと思った。だから「勉強はし過ぎると逆効果になる」という橋本が作り出した理論に橋本自身が従うことにした。つまり、勉強を止めて小説を読むのである。言い訳をしているような気がして、自分に甘いなあ、と思っただが、気がつくとも橋本は小説を右手に持っていた。脳だけではなく身体も、読みたいと思っっているらしい。勉強が面倒くさくなってきただけかもしれないが。

ふと時計を見ると、時刻は午後六時四十分だということに気づいた。小説も恐ろしい、と思う。七時にコンビニで中川と会う約束をしていたことを思い出し、橋本は小説に栞をはさんでから、財布と鍵と携帯電話をポケットの中に入れた。外出するときは、この三つ

は欠かせない。身体の一部のようになっていく。

準備が完了すると、橋本は玄関に向かった。そういえば、母親が帰ってきているな。とりあえず、出かけることを伝えておこう。

「ちょっとコンビニに行ってくる」

「ああ、行ってらっしゃい」

母親がそう返事すると、橋本は歩いてコンビニへと行った。もちろん、家の鍵はかけておいた。

久しぶりの再会が嬉しかったのか、橋本の足はいつもより早く動いていた。

コンビニへ着くと、店内に中川の姿が見えた。昼に出会ったときよりも可愛いと思うのは、コンビニの制服ではなく私服を着ているからだろう。

コンビニの入り口の前まで歩くと、中川も橋本が来ていることに気づいたらしく、可愛い笑みを浮かべて入り口に向かって歩いてきた。黒いコートに白のスカートを着ている。彼女がドアを開けると、橋本に向かって明るい声で言った。

「終わった終わった」

「第一声がそれかよ」

と橋本も明るい声で言い返すと、彼女は笑った。

彼女と再会・三

彼女は疲れていないように言う。

「まあ、今日は客が多かったからね。疲れが大きいんだよ」

接客業は苦手だ、と橋本は思った。一日で倒れてしまうだろう。

友達と会話するのは難しくないのだが、生徒の前で何かを発言するというのは昔から大嫌いだ。

「それで、どうするんだ？」

「うーん、そういえば私、まだ食べてないんだよね」

明るい口調で中川は言った。

「じゃあ、何か買うか」

橋本はコンビニに目を向ける。すると彼女は、

「えー、店で食べようよ。そのほうが会話もしやすいし」

と可愛らしい笑みを浮かべて言った。店で食べる、か。ということとはマクドナルドとかファミレスとかそういう場所に行くことになるわけか。再開した初日にそんな場所に行くなんて緊張するなあ。

しかも女子と一緒に行く。まるで全校生徒の前で発表するような気分だ。

そんなことを橋本が思っていると、彼女は突然訊いてきた。

「その前にお金は持つてるの？」

「三千五百円ある。まあ、中川のも払えるけど」

後半部分の台詞は何故か、勝手に口から出てしまった。見栄というものだろう。他人から良く思われたいという考えが俺にそう言わせたのだ、と橋本は考える。

「自分のは私が払うから大丈夫。まあ、橋本もそれだけお金があるなら、平気だね。近くのファミレスに行っても」

ファミレスは近くに一店ある。自転車に乗って行けば五分くらいかかる。一年前からある店で、数ヶ月くらい前に行ったことがあるが、値段は安いし、味も良かった。

「じゃあ、そうするか」

と橋本が答えると、中川がそのファミレスに向かって歩き出す。それに続くように橋本も歩き出した。

足を出すと同時に、心が飛び跳ねる。しかし、それは苦痛ではなかった。橋本はこういう経験は初めてだった。

歩き始めてから、橋本は「最近、生活はどう？」と訊いてみた。

中川は笑顔で答える。

「順調だよ」

「俺も。今は、大学へ行くために勉強をしている」

そう言つと、彼女は驚いた表情を見せて返事する。

「大学？ 私には無理だなあ。私は高校を卒業したら、働こうと思つてる」

どこで働くのか訊いてみたかつたが、大学へ進もうとしている俺が訊くと嫌味だと思われるかもしれない。そう考えた橋本は質問はしなかった。

「そうか」

左にある道に一台の車が通つていく。その後、橋本が訊いた。

「学校生活は？」

聞いた彼女は楽しそうな口調で答える。

「楽しいよ」

続けて、彼女は最近起こつた面白い出来事などを橋本に話し始める。コンビニが完全に見えなくなり、ガソリンスタンドの前を通り、気がつくファミレスが見えた。橋本と中川は会話を続けながら、店内へと足を入れた。

店内の雰囲気少し変わっている。その理由が、テーブルなどの配置が少し変わっているからだ。橋本は気づいた。

中川は窓側の席へ向かう。橋本は彼女に合わせることにした。というより、どこに座るかなんてどうでもいい。まあ、トイレの近く

だけは無理だが。

席に座ると、彼女はメニューを広げて、何を選ぶか迷っているような表情を見せながら訊いた。

「どれにする？」

橋本はもう一つのメニューを広げて見てみる。色々な料理が美味しそうに写っている。……これにするか。橋本は選んだ料理の名前を言った。

「ハンバーグ定食で」

すると、中川も自分が選んだ料理を右手の人差し指で指して言う。

「このスパゲツティにする」

「じゃあ、店員呼ぶぞ」

橋本は呼び出しボタンを押す。店内に呼び出し音が鳴り響いた。

店員がこちらに向かってくる。到着して、水の入ったコップを二つ、テーブルの上に置くと、「ご注文は何でしょうか？」と訊いてきた。さっき選んだ料理を橋本は店員に言うと、彼女も自分の選んだ料理を店員にメニューを広げて人差し指でその料理の名前を指しながら言った。

わかりました、と優しい口調で店員が言うと厨房へ向かった。料理が来るまでの間、橋本は中川と話していた。話題は学校生活のことを中心だったが、それ以外にも色々と話した。一番驚いたのが、彼女は一人暮らしをしていることだった。マンションに住んでいるらしい。

携帯電話のメールを確認しながら、彼女はそう言ったのだ。

彼女と再会・三（後書き）

進み方が遅いかな、と思います。しかし、描写を入れようとするところなるし……。まあ、これが一番良いのかもしれませんが、僕にはよくわかりません。

この小説は現実的な感じになっていくと思います。難しい科学が出るわけでもないし、超能力が出ることもないでしょう。

この小説とは関係は無いですが、今読んでいる『秘密』という小説は面白いです。何かの参考になれば良いな、と思いつつ、これで今回の後書きは終了とします。

これからよろしくお願いします。

彼女と再会・四

料理がテーブルの上に乗ばれてくる。とても美味しそうに見えた。橋本は割り箸を二つに割ると、ハンバーグに箸を進めて、口に入る大きさに切つていった。そして、口の中に入れる。ファミレスの料理はこんなに美味しいのか。まるで生きているかのように箸がハンバーグやご飯に進んでいく。

食べ終わると、橋本は中川に目を向ける。スパゲッティは半分も食べられていない。彼女は携帯電話のメールを確認しながら食べている。その表情は真剣だ。遅くなって当然だが、メールの確認がそんなに大事だろうか。

訊いてみようか、と思った時に中川が携帯電話の画面を見つめながら呟いた。

「美希もダメか……。洋祐は、今日は用事があるし……。」

真剣な表情から悲しそうな表情に変わり、暗い声だったので、「どうしたんだ？」

と橋本は訊いた。彼女は隠さずに教えてくれた。

「実は私、一人で暮らしてるんだけどさ、最近何か変なのよ。」

何が変なんだろうか。橋本が詳しく訊いてみると、彼女は答える。「マンションに住んでいるんだけどね。マンションの周りに不審者が出ていて、証拠は無いんだけど、私の部屋の窓を覗いてるの。」

橋本の脳裏に浮かんだのは、一人の少年。もしかすると、中川のことか好きなのかもしれない。だが、彼女に会うという決心ができないのだろうか。ほとんどが想像だが。

さらに詳しく訊いてみる。彼女は意外と、迷いを見せずに答えてくれた。

「四回もそういうことがあるんだ。」

そういう状況だと、一人でいるのが怖くなるだろうか。橋本はそう思った。

「さつき、携帯電話見ながら、ダメとか何とか言っていたのは、もしかして一緒にいてくれるのか、っていうこと？」

中川は頷いた。怯えているような表情を橋本に少しだけ見せていた。だが、彼女は急に笑い顔になる。それが作り笑いだということを橋本は見抜いていた。だから、何とかしたいと思った。

しかし、俺にできることはない、と橋本の心の中にいる誰かが言う。その時、右ポケットにある俺の携帯電話が振動した。それを取り出し、誰がメールを送ってきたのかを確認する。やはり、母親だった。

『まだコンビニにいるの？ 早く帰ってきなさい』

面倒だ。返信するのは止めておこう。

「誰からのメール？」

中川が訊いた。橋本は「俺の友達」と答えておいた。

会話が止まる。何とかしたい、と思うならば、この沈黙を何とかしてみる、と橋本の心の中にいる誰かが言う。

「あのさ……」

橋本は小声で言った。頭の中に色々なことを思い浮かべる。その時に中川が「洋祐」と言ったことを思い出す。小学生四年生の時の同級生に、名前が『ようすけ』という人がいたので、もしかすると同一人物ではないかと思った。

「洋祐って誰？」

中川が作っているような笑みを浮かべて、その問いに答える。

「あ、思い出したんだ。西野洋祐だよ」

西野洋祐。小学四年生の時は一緒に遊んでいたが、冬になると、一緒に何かすることが減り、敵対することが多くなった。嫌いというわけではない。良きライバルのような関係になったといったほうが正解だろう。

と西野について思い出しながら会話していたが、中川は突然、会話を遮るように早口で訊いた。

「時間ある？」

あるけど、と橋本は答えた。声が少し小さくなっていた。彼女の黒い瞳が何かを強く訴えているように見える。しかし、表情には怯えが見える。

「ねえ、お願いがあるんだけど」

彼女の口調が急に弱々しくなる。

「何？」

橋本は反射的に訊いた。何か、断りにくい雰囲気だった。

不審者を捕まえてほしい、と助けを求めているような顔をしながら依頼された時は、どう答えるべきなのか迷った。数秒の沈黙が流れる。

「警察は？」

橋本が沈黙を破って訊いてみると、中川は諦めるように言い返す。「証拠が無いから、動かないですよ」

決め付けているような言い方だった。その後には彼女は溜息をついた。その瞬間の表情には、言葉では言い表せないような悲しみが見えた。

思い出す事件・一

橋本は中川と一緒にマンションへ向かっている。橋本は携帯電話で母親にメールを送る。

『友達と食事に行くことになったから、帰るのが遅くなる』

携帯電話の電源を切っておけば楽になるのだが、帰った時に何を言われるのかを想像すると、電源を切ることはできなくなる。そう思いながら、携帯電話を右ポケットに入れた。

彼女はスパゲッティを全部食べられなかった。食欲も無くなるような問題で、俺が想像しているよりも悩んでいるのだらう、と橋本は考えた。暗い道を二人は何も言わずに歩いていた。

中川がマンションを指さす。マンションの窓から光が漏れている。四階まであり、建物の色は黒に近いと思った。

マンションに近づいてみると、入り口に誰かが立っているのが見えた。橋本との距離がかなりあるので、身長や体格はよくわからない。さらに近づこうと思ったが、中川の足が止まったので、真似するように橋本の足も止まる。動いてはいけないような気がした。

「どうした？」

橋本が訊くと、彼女は答える。

「あの人……」

彼女の目が大きく開き、怯えているような表情になる。

「不審者か？」

「うん」

彼女の声が小さくなっていることに気づいた。橋本は情報を整理してみた。

入り口にいる人が、中川の部屋を覗いている。その目的は不明で、中川との関係も不明。

もう少し情報が欲しい、と考えた橋本は入り口にいる人に気づか

れないように小声で中川に訊いた。

「あの人の特徴は？」

「窓から少し見たことがあるけど、高校生のようだった」

「他には」

「顔は男子だったかな」

男子で高校生……。橋本の脳裏に一つの仮説が浮かぶ。

「同じ高校の生徒じゃないのか？」

「絶対違う」

彼女は否定した。その口調は鋭かった。そして続ける。だが、その時の口調は弱々しい。

「顔に見覚えが無いし」

顔も見つたようだ。だが、詳しくは覚えていないらしく、「どんな目をしているか」と訊かれると顔を俯けて黙ってしまった。部分的なことはわからないようだ。

知らない男子高校生の正体が誰なのか、気になってくる。橋本は中川に言った。

「捕まえてくる」

橋本はマンションの入り口へ少しずつ近づいていく。中川は遠くで見守るように橋本を見ている。

少しずつ不審者の姿が鮮明になっていく。黒い髪は短い。着ている黒い服には白い線で英語のような文字で何かが表示されている。顔は下に向いていて、考え込んでいるように見える。

そして、二メートルくらいまで近づいた時、入り口にいた不審者が橋本を見た。確かに男子だった。

彼は顔を反射的に橋本からそらして、橋本がいる場所の反対の方へ逃げようとした。だが、その時に段差に右足が当たり、背中を空に向けてるようにして地面に倒れた。ドサッ、という音と共に「くっ」という言葉が不審者の口から出る。

橋本は倒れた不審者に近づいて訊いた。

「お前か？」

だが、顔は地面に向いたままで、何も答えない。橋本は不満があるような表情をして、溜息をついた。すると、倒れた不審者が起き上がる。痛そうな表情をしている彼を橋本は睨みつけた。

驚いたのか、彼の身体がビクツと動く。彼は橋本を我を失ったかのように見つめている。放心状態のようだ。そして、彼の目が橋本の右手にいった瞬間、

「……君は」

と声を漏らす。身体が少し震えている。どうということだろうか、と橋本は疑問に思った。そして、彼は呟く。

「橋本……か」

橋本の表情が固まった。これは夢だろうか。しかし、これは夢でも妄想でもなく、現実である。だが、その当たり前のことを橋本は少し疑った。

「どうしてわかる？」

橋本が思わず訊いた。すると、後ろから足音が聞こえる。振り向くと、中川が恐れるようにゆっくりと歩いてくるのが見えた。

思い出す事件・二

橋本と中川の視線が重なる。すると、彼女は小声で訊いた。

「捕まえたの？」

「ああ」

橋本は驚いているような不安定な声を出した。中川は、何だろうと思っっているような顔をして首を傾げる。

「この男……」

そう言った橋本は不審者の左腕を右手で掴んだ。未知の物に触れているような感覚になる。不思議な感触が彼の左腕から橋本の右手に、そして身体全体に伝わっていく。少し戸惑いながら続ける。

「……俺のことを知ってる人間だ。……名前は？」

その問いに不審者は小声で答える。

「……坂下」

坂下という少年はお化けを見ているかのように怯えている。細い目をしていて、肌は荒れている。中川とは正反対だ。顔は小さく、高校生というよりは中学生のように見える。

彼は小学四年生の時の同級生だった。だが、『ある事件』のせいで彼は転校してしまった。思い出したくない記憶の一つだ。

「これで逃げ場は無し、か」

坂下の言葉に橋本は何も言い返さず、坂下を見つめていた。少し面白いな、と橋本は思った。一瞬だけだったが、ゲームをしているような気分になった。

彼は口を開く。

「この方が良いかもしれない。逃げ場があるから僕は逃げる。だから、逃げ場は無い方がいい」

何を言いたいのかわからない。寒い外で長話するのは嫌いなので、橋本は単刀直入に訊いた。

「部屋を覗いていた理由は何だ？」

「覗いていた、か。そんな風に見られたのか」

坂下は残念そうな口調で答えた。本人に部屋を覗こうという気は無かったらしい。だが、これが演技だという可能性もある。

次に、彼は理由を話した。

「中川が真犯人だ。……君が僕を押さなければ、誰も傷つかなかったんだ。それなのに、君は罪を全部僕に着せた。今まで、何とか耐えてきたけどね……無理らしい」

憎しみや悪意が混じっている彼の言葉が橋本の脳裏に響く。中川も思い出したくないような表情をしている。二人とも顔をしかめた。そのことを坂下は無視して、続ける。

「『あの事件』は終わっていないんだ」

*

橋本には少し感謝している。彼が逃げ場を消してくれたので、僕は言いたかったことを伝えることができた。しかし、それは他人の力を借りたということになる。

坂下の心に微妙な思いが広がる。僕自身が最初に行動することができなかったのだ。と自分を責める。

『あの事件』で坂下は人間不信に陥った。裏切られたダメージが彼の心に大きな穴を開けて、色々な思いがその穴に吸い込まれていった。心の中に残るのは憎しみや悲しみ、悪意などのゴミのような感情だけだ。何故、そういう感情は穴の外へ流れていかなかったのかはわからない。

中学校に入ってから少し落ち着くようになったが、心に開いた穴が治ることは無かった。住んでいる都道府県は同じでも通う中学校は中川や橋本の通う中学校とはかなり離れていたが、嫌な気分だけが溜まったまま生活していた。

そして時が流れて、高校生になっても状態が変わることは無い。時は何も解決してくれなかった。

この呪いのような何かは一生消えることが無いのだろう、と坂下は思っていたが、高校三年生の夏休みの一日前に『あの事件』の記憶がフラッシュバックのように蘇った。恐怖を感じた。

その時に思った。このままではいけない、と。しかし、気が弱かったのでマンションの中に入ることができなかったのだ。逃げ道があったからだ。別に行かなくてもいい、という選択肢が残されていたから、行動する決心ができなかった。

しかし、橋本がその選択肢を消してくれた。だから今、ついに進むことができる。……微妙な心境だが。

思い出す事件・二（後書き）

視点が変わりました。まあ、伝える必要も無いのですが。

『あの事件』が物語の鍵になります。それがどういふ事件か、ということは黙秘します。次回の楽しみにしてください。

登場人物はさらに増えていきます。物語が上手く進むか、少し不安ですが頑張っていこうと思います。

読んでくれている皆様には感謝しています。本当に感謝しています。頭を深く下げて「ありがとう」と言いたい気分です。

思い出す事件・三

坂下は背筋を伸ばし、細い目を橋本と中川に向けて言った。

「『あの事件』で僕がどれだけ苦労したか……」

「待て」

橋本が遮って、続ける。

「被害者は木村さんだったよな。で、木村さんを押したのは君。それで解決しただろう。逆恨みは止めてくれ」

その言葉が坂下の心に突き刺さる。この野郎、と心中で呟いた。自分の中にある理性が崩れてしまいそうだった。二秒くらいが経過すると、坂下は口を開く。

「解決した、と？」

認めていないような言い方だった。橋本は見下すように坂下を睨みつけている。苛立ちが増していくのが自分でもわかった。中川は怯えていて何も言えないような状態だ。

「あれは偽装だ」

橋本に負けないように坂下も見下すような瞳を見せたが、身長が橋本より低いせいか、その強さは半減されているように思えた。目に力を入れたのに、それが全て無駄になってしまったかのようにだ。

だが、ここで逃げてしまえば、終わりになってしまう。それだけは絶対に嫌だった。

「たしかに僕が木村に当たって、木村が道路へ押されていった。それは間違っていない。でも、僕が木村に当たる原因を作ったのは」

とここまで言うと、坂下は右手で中川を指さした。すると、中川はビクツと電流が流れたように背筋が伸びて、驚いた表情で坂下を見つめた後、怯えた目を橋本に向けた。

橋本と中川は恋愛関係を持っているのか、と思ったがそんなこと

は気にせず、坂下は続きを突き刺すように言った。

「お前だ。中川、お前が僕を押した。そして、押された僕は木村に当たった」

言い終えると、数秒の沈黙が三人の中に流れた。冷たい風が痛く感じる。隣の家から聞こえる「カチャカチャ」という食器を洗っているような音が妙に脳裏に響いた。何か言えよ、と坂下は思った。

すると、その思いが通じてしまったのか、橋本が口を開いて呟いた。

「昔のことじゃないか」

彼は面倒だと考えているような表情をしている。だが、僕はその面倒なことで人生の八割は損しているような気分になるんだよ、と坂下は心の中で言い放った。

そして、坂下は二人に向けて言った。

「被害者に、昔という言葉は通用しないんだ」

*

事件は被害者と身の回りの人間に永遠に治ることのない傷を与える、という言葉が橋本の脳裏に浮かぶ。たしかに坂下の言葉が全て間違っているとは言い切れない。

そして、小学四年生の時に起きた『あの事件』のことが次々と蘇る。

あの時は六人で遊んでいた。六人とは、橋本と中川と坂下、そして木村、他には……西野と島田がいた。色々な遊びをしていたが、事件が起きた時はみんなで、何でそんなことをしていたのかは覚えていないが、押し合いをしていた。……力が強い人を決める遊びだったかな。喧嘩ではなかったことは確かだ。

意識していなくても記憶が蘇っていく時、坂下は黙って橋本と中川を見つめていた。橋本が考えている表情を見せていたので、待つてくれているのだろう。

遊んでいる途中、坂下が木村を押しした。すると、木村は倒れるようにふらふらとした不安定な歩き方で道路まで歩いていった。どうしたのだろうか、と思った瞬間、彼女は道路の中まで入り、横から走ってきた車に激突。命を失うことにはならなかったし、後遺症も残らなかったが、治るのにかなりの時間が必要になり、治った時は別の学校へ転校してしまった。

その時はとても悲しかった、と橋本は思った。その感情も少し蘇る。

そして、犯人探しをした。誰が木村を押ししたのか？ 結論は「坂下が木村を押しした」だった。坂下の身体が木村の肩に当たるのを見たという人物がいたからだ。

とここまで蘇ってから、橋本は中川を見た。中川は面倒だと思っているような表情をしている。その人物の一人が中川だったことを思い出す。

何故か、木村が車に激突した場面が脳裏で繰り返し蘇っていた。

右側からスピードの速い黒に近い色をした車が、木村に激突し、彼女は飛ばされた。彼女の着ている服が赤く染まり、道路も部分的にだが赤く染まっていた。橋本たち五人や周りにいた人々の中には、驚いて何も言えない人や、悲鳴を上げる人などがいた。

「思い出したのかな」

と坂下が突然言った。「ああ」と橋本は反射的に答える。顔が下向きになっていることに気づいたので顔を上げると、坂下の真剣な表情が見えた。

思い出す事件・四

橋本は坂下の顔を見つめる。二人の鋭い視線が重なり、冷たい風が身に染みる。その時に橋本の後ろから少し怒っているような声が聞こえた。

「私を犯人にしたかっただけでしょ！」

中川だった。橋本が振り返ると、彼女は顔をしかめていた。彼女は橋本の驚いた表情を気にしないで、さらに怒鳴るように言った。

「今まで、こんな変態なこととして、被害者とか言ってるのは変ですよ！」

心の中に溜まっていた怒りや苦しみを一気に吐き出しているように見えた。ここまで言われたので坂下も少しは驚いているだろうと思いつつ、橋本が坂下のほうへ顔を向けると、予想とは違って、彼は憎しみのオーラを顔面から漂わせていた。驚いて一歩下がっているのではなく、逆に反抗しているのだ。

彼は舌打ちをした。舌打ちをすることで、怒りが身体の外へ出ないように抑えているのかもしれない。一触即発の雰囲気だった。そして、その間に橋本が棒のように立っている。

場面が変わったかのように、マンションの入り口の前で三人の中に沈黙が流れる。吹き続ける冷たい風が二人の熱を冷やしてくれることを橋本は願った。その願いが通じたのか、中川が呆れたような口調で言った。

「部屋に戻る。橋本、ごめんね」

そして、彼女はマンションの中へ入ろうとする。その時に坂下が冷たい声で言い返す。

「逃げるのか」

彼が倒れていた時と今の彼では別人のように橋本には見えた。これが二重人格というものだろうか。彼の睨んでいる目は中川に向け

られている。

中川は足を止めた。そして、面倒なことに巻き込まれたと思っ
ているような表情を坂下に向ける。それを見た橋本が弱気な口調で彼
女に言った。

「まあ、このままマンションに戻っても、坂下は諦めないと思うし
……」

「……嫌な人」

彼女は諦めているように見えた。仕方ない、坂下の相手をするか、
と思っっているのかもしれない。本心がどうなのかはわからないが、
もしかすると、彼女が犯人の可能性もあるし。

ということは、俺も容疑者の一人になるのか　という言葉が橋
本の脳裏に浮かんだ。それと同時に、橋本の心の中に変な感情が生
まれる。心が飛び跳ねて、「面白い」という感想が思いつく、この
空気に一番合っていないと思われるこの感情は何だろう。

橋本が口を開いた。

「で、坂下。最終的にお前はどうしたいんだ？」

中川は坂下を嫌うような目で見つめていた。坂下は中川とは目を
合わせないようにして、答える。

「謝ってもらうし、まあ、木村にも伝えておきたい。誤解されるの
は嫌なんだよ」

お金のことを言わなかったことに橋本は少し感心した、……とい
うのは、過大評価かもしれないのだが、本気のように見えたのは確
かだった。

彼は続ける。

「僕を押しした中川が犯人であると、伝える」

坂下と中川の危ない視線が重なる。口論になることを恐れた橋本
は急ぐような口調で坂下に言った。

「まあ、決め付けるのは変だろう？　他にも容疑者はいるんだ」
すると、彼は橋本を見つめた。疑っているような目だった。俺が

犯人だと言いたいのか、と心の中で反論する。

思い出す事件・四（後書き）

もうすぐでクリスマスですね。皆様は何をする予定でしょうか。僕は特に何もしません。友達と遊ぶかもしれませんが。カラオケとか行きたいです。

クリスマスが無くての良いような気がします。意外と恋人がいる人って少ないような気がするのですが、どうなのでしょう。隠しているのでしょうか。クリスマスの夜は一人で小説でも読もうと思います。恋愛小説は何となく嫌なので推理小説にします。

こうというのが、僕には似合っているようにも思えます。

混乱する日々・一

容疑者は何人いたのだろうか。坂下は『あの事件』が起こったときの場面を脳裏で蘇らせる。容疑者は四人だ。もしかしたら、彼らは五人だと言いかもしれない。自分も入れて、という意味不明な言葉と共に。

「橋本」

坂下が小声で言うと、橋本が坂下を見つめる。顔で訊いているようだ。坂下は言った。

「西野とかもいた。そういう人とは今も知り合いか？」

橋本は中川のほうを見た。だが、何も言わない。表情で訊いているのだらう。二人がどういう関係なのか、少し気になる。というよりは、二人が恋愛関係とか友人関係という幸せな関係を持っていて楽しそうに日々の生活を送っていることに嫉妬しているのかもしれない。

その嫉妬のような感情が坂下の心を微妙に苦しめている。すると、中川が坂下とは目を合わせないようにして、呟いた。

「いるけど」

彼女は溜まった負の感情を吐き出すかのように、低い声で続ける。「何か？」

坂下は少し怯えた。声でここまで背筋が震えたのは久しぶりだ、と思った。これではダメだと思い、坂下は全身に力を入れる。怯えを見せない口調で答える。

「呼べ。と言つても、今日はダメだな。明日だ。明日がダメなら明日だ。絶対に集合させるんだ」

それぞれの言葉の語尾の部分の声には力を込めた。聞いた中川は面倒な表情をしている。坂下は彼女の気持ちがよくわからない。

それとは少し違って、橋本の表情には少しだけが一瞬笑みが浮かんだ。見間違いだらうか、と思ったが、そうではないようだ。彼

は頷いたのだ。僕の意見に賛成しているのだろうか。理解してくれているのだろうか。そうだとすれば感謝したい。

坂下は中川に顔を向ける。視線が合うと、彼女が目をそらしてきた。面倒だと思っているが、断つても意味がないと気づいているのかも知れない。

僕は君に嫌われても何とも思わない、と坂下は心の中で呟くと、「明日、来るからね。午後一時に」と二人に向かって言う。そして足を進める。橋本の横を通り、中川の横を通る。彼女は最後まで目を合わせてくれなかった。別に気にしていないのだが、ここまで非協力的だと解決させることが難しくなるなあ、と坂下は悩んでいた。頭の中に色々と思い浮かべながら、坂下は自宅へ帰る。何となく何も思わずに振り返ってみた時には、二人の姿は見えなかった。家の窓から漏れる光と、空に広がる闇が坂下の視界に入っている。

*

坂下の姿が見えなくなると同時に、中川は舌打ちを何回もし始める。その音が橋本の耳に届き、頭を微妙に刺激する。何だか、気分が悪い方向へ行ってしまうようになったが、彼女の気持ちを考えると、何も言えなくなる。止める、とは言えない。

一分くらいが経過すると、彼女は舌打ちを止めた。そして、呆れたように言った。

「何、あの人。というか、どうしよう」

「ああいう人間に相手をしないうという態度をとるのは逆効果だ」

聞いた中川は溜息をついた。橋本は自分の意見を説明し始める。

「坂下は『ある事件』の真相を見つけようとしている。そのために中川に近づいた。坂下が調べて、最初に見つけたのが中川かもしれない。だから彼は、呼べ、と言ったんだ。ここで呼ばなければ、坂下は絶対にこう言うだろう。……何故、呼ばない？ 犯人だと知られるのが怖いのか、と。だから、ここは諦めて付き合うしかない。

明日、俺も行くからさ」

ここまで言うと、橋本は声が漏れるような深呼吸をした。説明が終わったことを知らせるサインだ。だが、それには気づかず、数秒の沈黙で、説明が終わったのだと理解した中川は仕方なく「わかったよ」と答えた。

彼女は今は夏休みであることを呪っているのかもしれない。表情に見事に表れている。その表情を少しも変えずに暗い口調で彼女は訊いた。

「西野とかにメール、送らないとダメかな」

西野……洋祐か、と自分で理解する。

「そうだな。島田もいたと思うんだが、彼にメールは送れるか」

「島田はわからないんだよね。高校違うし」

「わかった」

橋本はそう言うと、作り笑いを浮かべた。だが、中川の表情が良くなることはなかった。今日は無理だな、と思った橋本は中川に「さようなら」と言うてから、自宅へ帰った。

橋本は歩きながら空を見た。真っ黒だった。その時に、明日はどうなるのだろうか、という言葉が脳裏に浮かぶ。この言葉の裏には、少しだけが期待も隠れているのだと、橋本はわかっていた。

混乱する日々・二

自宅に帰り、リビングへ行った橋本を待っていたのは堅苦しい表情をしている母親だった。壁が白色で、電気がついていて明るいので、黒に近い茶色の服を着ている母親が地味に見えてしまう。ちなみに父親はまだ仕事だ。尋問が始まるのか、と思うと母親は堅苦しい表情を少しも変えずに口を開いた。

「突然、友達と夕食ってどういうこと？」

どう答えるか考えておくべきだった。テレビに目を向けると、芸人が大物芸能人と会話している場面が見えた。だが、テレビを見ている場合ではない。神経を脳に集中させて、橋本は考える。そして、思いついた言い訳を口から出す。

「コンビニで会ったんだよ、友達に。それで、まあ、食事しようということに……」

少しづつ声が小さくなっていった。逆に怪しく思われるだろう、と自分に向かって心の中で言う。母親は疑いの目を橋本に向けながら訊いた。

「友達は誰？」

一番訊かれたくない質問だ。本当のことは言えないし、女子なんて言った瞬間に終わりだ。何が終わるかはわからないが、悪い方向へ行くのは確かだ。それは断言できる。

そこで、橋本はこう言った。

「坂下、という小学校の時の同級生」

母親の目を見て、付け加える。

「男子だよ」

それから数分くらい、橋本は頑張つて言い訳をし続けた。そして何とか勝利を手にした。母親は半信半疑の表情をしていたが、これ以上訊いても無駄だと思ったのか、諦めてくれた。

二階の自分の部屋へ戻ると、橋本は解放感に包まれたが、疲労感も襲ってきた。母親を説得するのは疲れる。勉強を少ししてから寝ようと考えて問題集を広げるが、右手に持った鉛筆が動かない。何となく、勉強をする気になれない。問題は頭の中に入らないし、逆に坂下や中川のことは頭の中から離れない。

橋本は鉛筆を置いて、トイレへ向かった。寝ることにした。その時に少し考えていた。俺の心身を支配しようとしているのは疲れか、それとも別の何かか。

トイレを終えると、橋本は自分の部屋に戻り、ベッドの上で寝た。何故か、睡魔が襲ってくる時間がいつもより遅かった。

目が覚めてから時計を見る。七時二十分だった。当然のことだが午前である。窓に目を向けると、光り輝く太陽が見えた。思わず「眩しい」と呟いて、太陽から目をそらした。

その時に坂下が言った「午後一時」が脳裏に浮かんだ。今日は午後一時に中川が住んでいるマンションの出入り口に行かないといけないことを思い出す。中川は嫌だと思っているのだろう。

起きた時刻が遅かったということではないが、眠気がほとんど無いことに気づいた。太陽を見たからだろうか。しかし、そういうことは数日前にもあったし、思い出しても数え切れなと思う。期待というものだろう。俺も相当悪い人だな、と橋本は思った。だが、よく考えてみると、そう思うのは当然かもしれない。

昔の事件の真相を調べる 探偵のようで面白そうだ。少なくとも俺は犯人じゃない。坂下にも木村にも触れていない。中川には失礼だが、午後一時が楽しみで仕方がない。いつもとは違う何かが待っているような気がして、心が飛び跳ねる。

眠気ではなく元気のような感情が生まれる。橋本は思わず笑みを少し浮かべながら一階へと向かった。階段を一段下りるだけで好奇心が身体の中で上下に大きく揺れる。

リビングのテーブルには朝食が置かれていた。キッチンにいた母

親が顔を橋本に向けて言った。

「おはよう」

表情に異変は見られなかった。昨日のことは気にしていないらしい。良かった、と心中で呟いて、一安心してから「おはよう」と橋本も言い返すと、椅子に座ってから箸を右手に持った。今日の朝食は白ご飯にみそ汁、ハンバーグに千切りにされたキャベツとプチトマトが二つ。ハンバーグは昨日作ったと思われるが、ハンバーグは昨日も店で食べた。二回連続とは……どうでもいい奇跡だ。まあ、この奇跡は誰にも言わないだろう。そう思いながら、橋本は朝食を食べていた。ハンバーグは好きなので、苦痛ではない。

食べ終わると、ハンバーグやキャベツが載せられていた皿の上に箸を置いて、椅子から立ち上がる。母親がキッチンからリビングへ移動していたことに気づいた。

文句は言わないだろう、と思いつつ橋本は雑誌を読んでいる母親に言った。

「午後一時から友達と勉強するんだけど、良い？」

「友達って……坂下君と？」

母親は雑誌を読みながら訊いた。橋本は「ああ」と答えて頷いた。

「まあ、良いけど」

そう言つと、母親は黙って雑誌を見つめる。

橋本は時計を見て時刻を確認してから、二階の自分の部屋へ向かった。約束の時間まで残り五時間二十分だった。力や元気が身体の様々な部分から次々と湧いてくる。

混乱する日々・二（後書き）

小説を書く時に、皆さんはどうしているのでしょうか？

想像をしている、という人が多いと思います。僕もそうです。場面を想像して、それを文章にすることをしていきます。しかし、難しい。意外と書き忘れていたりすることも多いですからね。

気をつけて書き続けていきたいと思えます。

話は変わりますが、もう一つ、小説を作ろうとしています。流れは決めています。短編集で、ジャンルは青春ミステリになると思えます。

発表はまだしていませんが、もし発表した時はその作品も見てもらえると嬉しいです。

混乱する日々・三

自分の部屋へ戻った橋本は時計を見た。七時四十一分。ということとは、残り五時間十九分。一分しか縮まっていけない。これが時の流れというものか。

橋本は勉強しようと思った。五時間以上もあるのだ。少しはしておかないとダメだろう。勉強机に向かつて、椅子に座る。問題集を開いて、鉛筆を持つ。いつもと変わらないスピードで問題を解いていくが、平均的なスピードよりも少し遅い。問題をよく見て、単純なミスをできる限り少なくしておきたいからだ。問題の読み間違えで点数が下げられるのは嫌だし。

一問を解き終わると、橋本は時計を見た。時刻は七時四十五分。ということは残りは……、考えなくても良いか。五時間はあることは確かだし、……これが時の流れというものか。問題集に再び目を向けて、二問目へ挑戦する。それが終わると三問目、次は四問目と確実に解いていく。

五問目を解き終えた時点で、答え合わせをしようと思った。たくさん解いてから一気に答え合わせをするよりも少しずつしたほうが間違っていたとしても正しい答えを理解しやすくなると思うからだ。その結果、五問の中で間違えたのは一問だった。三問目の問題か。

答え合わせも終了すると、橋本は時計を見た。時刻は八時十五分。残り四時間四十五分。確認すると、問題集に目を向ける。これの繰り返しを橋本はしていた。

集中力に限界が来た。問題が拒否するかのように入ってこない。頭が重く感じていることに橋本は気づいたので、問題集を閉じた。その上に鉛筆と消しゴムを置く。

普通は眠気が襲ってきてもおかしくはないのだが、今回は襲ってこないし、それに近いようなこともない。無意識に時計を見ると、

十時を過ぎていた。何回確認をしたのだろう。橋本は十分くらい、呼吸以外のことをしなかった。

残りは二時間三十分。かなり近づいてきた、と思った。それからは勉強をしないで、小説を読んだ。小説の世界に行つてしまい、現実での時の流れを忘れるという危険性もあるのだが、今回は大丈夫な気がした。

時計の短針が真上を指した時に、橋本は読んでいた小説に栞をはさんで立ち上がった。家を出るには少し早い気もするのだが、坂下に来る前に中川のマンションへ着いたほうが良いのではないかと思つたので、橋本は準備を開始する。

と言つても、携帯電話と財布と鍵の三つしか必要ないが、外出をする時には欠かせない。

そして、橋本は一階に下りる。

「行つてくる。」

と早口で言うのと靴を履いて、ドアを開けて外へ飛び出すように出た。吹いてくる風が新鮮に感じる。思わず笑みが浮かんでしまうが、他人から見ると変に思われるので、普通の表情に戻した。

鍵をかけて、ドアが開かないことを確認すると、橋本は歩き始めた。昨日中川と一緒にマンションへ向かっていた時に歩いた道を脳裏に浮かべながら、橋本は進んでいた。

昨日のことなので忘れるわけがない。中川の住んでいるマンションが見えてきた。携帯電話で時計を確認する。「12:27」と表示されていた。三十分も余裕があるのか。だが、あり過ぎても逆に困る、と橋本は思った。出発する時間が早過ぎたか。歩くスピードを遅くして、マンションへ向かった。

自動販売機が見えた。飲み物がどうしてもほしいというわけではなかったが、何となく買ってみる。百二十円を入れて缶コーヒーのボタンを押す。ゴトゴト、と缶コーヒーが落ちてくる音がした。そ

の音が止まると、缶コーヒーを取り出す。

コーヒーを飲みながらマンションへ歩き始める。ブラックにしておけば良かった、と少し後悔する。かなり甘い。最初に飲んだ時は裏切られたような気がした。この気分は別の意味で苦かったりするのだが、その苦さはすぐに消えた。

混乱する日々・四

マンションが見えてきた。薄い茶色だった。橋本が入り口を見てみたが、誰もいなかった。坂下は来ているかもしれない、と思っていたのだが。

飲み終えた缶コーヒーをどこに捨てようか、と顔を左や右に向けるが、ゴミ箱のようなものは見つからない。橋本は携帯電話で時刻を確認する。三分しか進んでいない。余り過ぎた時間を潰すためとゴミ箱を探すためにマンションから離れるように歩き始める。

*

昨日の、中川からのメールで西野は驚いた。

『午後一時にマンションに来て。他にも色々な人が来るけど、多分時間がかかりかかる』

色々な人が誰かということも気になるし、時間がかかることも気になる。それに彼女から呼び出されることも初めてだったので、どいう理由で呼び出したのかも気になる。脳裏に浮かぶ疑問符はさらに増えていく。

用事も無いし、大丈夫だし、行ってみるか。楽しいことかな。面白いことかな。気分が良くなっていることに西野は気づいた。

時刻は十二時三十五分だった。そろそろ出発しよう、と西野は自転車を自宅の駐車場から持ってきた。そして、自転車に乗って進む。風が冷たいが、そんなことは気にならない。

マンションが見えてきた。意外と早く着いたなあ、と思いつつマンションの『自転車置き場』と書かれた場所まで向かい、そこに自転車を停める。念のために鍵をかけておいた。その後に、鍵を左ポケットの中に丁寧に入れた。

時刻は十二時四十五分。十五分の余裕とは微妙だなあ、と思った。すると、誰かがマンションに近づいてくるのが見えた。最初はそこまで気にならなかったが、顔をこちらに向けて近づいてきているので、少し異変のような何かを感じた。誰だろうか。顔は見たことがない。

近づいていた男子は西野に向かって言った。

「中川さんを知っていますか？」

「知ってるよ」

彼は中川を知っているらしい。中学生に見えるし、高校生にも見えるが、他校生であることは確かだ。だが、中川が他校生と何らかの関係を持っているとは思えない。しかも男子だ。彼氏だろうか。訊いてみたくなる。

坂下と言います、と彼は言った。

「あ、ああ……」

西野が声を漏らすと、坂下という少年は真剣な口調で言い始めた。「あの事件」を知っていますか？ 小学四年の「

その問いに西野は「知っている」と答えた。「あの事件」は高校の友達にも話したことがある。羨ましそうな顔をして訊いていたことを覚えている。普通は見れないような光景だったからな。忘れるわけがない。頭の中にしっかりと保存されている。坂下が「あの事件」の犯人であることも忘れていない。

西野の中では「あの事件」はほとんど美化されていた。人が車に激突する瞬間は今でも思い出すことができる。ホラー映画のように恐ろしくて、少し面白い。

坂下は小学校四年の時の同級生だった。中川も同級生だったし、これは昔の仲間で遊ぶために集めさせたのか、と西野は推理する。小学四年の時から、俺は中川に好意を持っていたことを西野は思い出す。

西野は坂下に訊いた。

「他に誰が来るんだ？」

「橋本と中川と、島田は……どうだろう。中川たちがメールアドレスを知っていれば来るかな」

え、と西野は疑問に思った。一人、忘れられていることに気づいた。

「木村は呼ばないのか？ 仲間だったのに」

すると、坂下は残念そうな表情をして答える。

「木村は居場所がわからないし、親が会わせてくれないと思う。『あの事件』のせいだ」

『あの事件』の犯人は坂下なのに、他の人が木村を押ししたような言い方をしたので、西野は少し苛立った。思わず顔をしかめるが、坂下は納得できないような表情をしていた。まるで犯人は自分ではないと言っているかのようだ。だが、そんなことは言わないだろう。昔のことだし、俺も坂下を責めるつもりは少しも無い、と西野は思っていた。

その時に、誰かがマンションに近づいてきた。上は黒、下は濃い黄色に近い白の少年。携帯電話で時間を確認している。

「橋本だ」

と坂下が突然言った。西野は橋本の顔を見つめる。小学校の時は雰囲気が違うなあ、と西野は懐かしいような気分になった。

西野たちに気づいた橋本が足早で近づいてきた。

混乱する日々・五

「何だ、来ていたのか」

橋本の明るい口調が、西野の気分をさらに高めていく。部活動も終わり、暇が多くなり、勉強に追われ、毎日が楽しくないと少し感じていたので、今はとても心が飛び跳ねている。

坂下が橋本に言った。

「来てくれたんだね」

ああ、と橋本が答えて頷いた。この時に西野は少しだけだが変だと思った。二人とも表情が硬い。坂下は目も何かを決意したように鋭く見える。だが、よく考えればおかしいことではない。久しぶりの再会で緊張しているのだろう。すぐに表情も良くなるだろう、と西野は思った。

坂下が自分の腕時計を見て、時刻を確認する。

「十二時五十二分。まあ、行きますか」

坂下が静かな口調で訊くと、西野は感情を抑えきれず、

「行くうぜ、行くうぜ」

と言った。すると、坂下の鋭い視線が西野に向けられた。橋本も白か黒かはつきりしない微妙な表情を浮かべている。俺、何か変なことを言ったのか、と心の中で訊いた。口には出しにくい雰囲気だった。

西野は二人から逃げるように顔を空に向ける。灰色の雲が空の奥に見える。これから天気が悪くなっていくのだろうか。少し嫌だな。西野の気分が割れた風船のように下がる。

数秒の沈黙が流れると、坂下が「行くよ」と言って、入り口に向かって歩き始める。橋本もそれに続くようにして歩く。西野も同じように行動する。少し納得できない。

マンションの中に入り、五歩くらい進むと、坂下の足が突然止ま

った。どうしたのだろう。

「どこに中川の部屋があるんだ？」

……知らないのか、と心中で言い返す。知ってる、と坂下が後ろに振り返って橋本と西野に訊いたが、西野は首を横に振った。

「俺も知らん」

橋本も知らなかった。橋本は私立の有名な進学校に進んだらしいが、勉強しなくても良いのだろうか。先程の嫌な沈黙のせいか、西野は質問できなかった。言葉が喉を通らない。

坂下は階段へ向かった。全部の部屋を見るつもりだろうか。面倒だ、という言葉が脳裏を渦巻いた。だが、ここで帰ると絶対に変だと思われるので、仕方なく西野も足を進めようとした。その時だった。

「あ、来たんだ……」

悲しんでいるような声が階段側から聞こえた。それが中川である。と西野は気づいたが、脳はそれを認めなかった。昔の仲間が集まって遊ぶ、というのは間違っているのか。

階段から彼女はゆっくりと下りてきた。逆光で少し見にくいだが、楽しそうにしているとは思えない。薄い赤色の服に黒のスカートを着る彼女は、セーラー服を着ている時よりも綺麗に見えるのだが、何かを背負っているように表情が暗く、階段から下りる速度も遅かった。

西野は思わず呟いた。

「これ、どういうことだ？」

その問いに坂下が冷静な口調で答える。

「『あの事件』を本当に解決させる」

本当に、という部分に何か隠れているような気がした。だが、坂下が木村を押し、ということと解決している。西野は『あの事件』の記憶を脳裏で蘇らせながら、考える。

そして、坂下に訊いた。

「お前は、無実だと言いたいのか」

「その通り。気づくのが早いね」

呼ばれた理由が遊ぶことではないことに気づいた。でも、こういうのも悪くないかもしれないと西野は少しだけ思っていた。推理ゲームのような楽しさがあるように思える。

しかし、昔のことだ。情報量が少ないし、得ることも難しい。西野は坂下の顔を見ると、彼の真剣な表情が見えて、その一秒後に口が開いた。

「場所を変えようか」

恐れているような口調だった。緊張しているのだろうか。坂下が冤罪か、ということに関しては興味が無い。だが、こうやって何かを調べるような非日常的なことをするのが楽しいと思えるのは確かだった。

混乱する日々・五（後書き）

コンビニに入り、お茶を持って、買って、その時に気づいたのですが、僕の好きな歌が流れていたのです。まあ、お金も支払い、売買が成立したのでコンビニから出るのが普通であり常識なのですが、どうしてもその歌が聞きたかったので、コンビニの中を歩き回ってしまいました。他にも食べ物を買おうとしているように見せていたので、大丈夫でしょう。まあ、最終的に買わなかったので、店員はどう思っているのかわかりませんが。

振り返ると……

僕が、ね。変だった、と。

そういえば、そのコンビニは閉店するらしい。

とまあ、どうでもいい話でした。

混乱する日々・六

四人はマンションを出た。その時に中川が呆れたように言った。

「私は行かないから。まあ、証拠があつたら持つてきて」

証拠なんて見つかるわけがない、と橋本は思った。小学生の時の事件を調べたとしても、解決に近づく可能性は低い。だが、心はこの状況を楽しんでいる。心理というのはよくわからないが、今しようとしていることが探偵の仕事に近いからかもしれない。

ああ、と坂下が中川に向かって言い捨てると、マンションから離れるように歩き始める。西野は自転車に乗ってゆつくりと進んでいる。坂下に合わせているのだ。西野はどう思っているのだろうか。中川の同級生らしいし、彼女に少しは同情しているのだろうか。詳しく知りたいとは思わないが。

そういえば、どこに向かっているのかわからない。橋本は坂下の右横を歩いて、訊いてみた。

「今、どこに行こうとしているんだ？」

「僕の住んでいる部屋」

と彼は答えた。続けて、橋本は質問する。

「一人暮らし、か？」

「そうだけど、何か問題がある？」

「無いよ」

そう答えながら、橋本は坂下の後ろを歩いていった。西野の顔を見ると、口が動いているのが見えた。呟いているように見えるのだが、何か知っていることがあるのだろうか。橋本は木村のことを思い出してみるが、木村が女子で、動物が好きだということしか頭に浮かばない。

彼は運動が得意のように見える。髪が短くて、大きな目をしているからかもしれないが、清々しい雰囲気を漂わせている。顔立ちが良いことも理由の一つになるだろう。

そして、考えることを諦める。それからも歩き続けて、数分後。坂下が右手の人差し指を前に出した。

「あれが僕の住むマンション」

中川が住んでいるマンションよりも少し低く、壁は赤茶色だったが、色が薄くなっている部分も見える。建てられたのは十数年前のように思える。

マンションの入り口の傷が付いているドアを開けて、中に入ると右に階段があり、坂下はそれを上る。橋本と西野もついて行った。灰色の床と靴が触れる時に、コツ、と音が鳴り響く。それ以外の雑音が無く、薄暗いので寂しいと感じる。二階まで上がると、左へ曲がり、そこから三番目のドアの前まで歩くと、坂下は足を止めた。ドアの鍵を開けて、中に入る。

部屋の中は綺麗だった。と言っても、玄関の近くにある小さな部屋しか入れてもらえない。綺麗というよりは、家具が少な過ぎると表現した方が正解かもしれない。もしかすると、こうなることを坂下は最初から考えていたのではないかと思ってしまう。

小さな部屋に三人が入ると、坂下はドアをゆっくりと閉める。その後、口に開いた。

「島田の居場所も気になるが、僕が無実であることを先に証明した方が良いかな」

証拠も無いのにどうするのだろう。橋本は少し期待した。

「今、思えば、あれは不自然だ。僕は木村を押しした。何を使って？」
その問いに西野が当たり前のよう to 答える。

「手、だろうな」

「だけど、僕の手は木村には向けられていない」

橋本は記憶を蘇らせる。衝撃的なことだったので、思い出せるかもしれない。

坂下の後ろに木村がいて、坂下の目の前には中川がいた。そ

れで、坂下が木村を押しした。

後ろということは、木村は坂下の背中側に立っていたことになる。ということは、手が届かない。

この記憶が完全に間違っているようには思えなかった。鮮明とはいえないが、七割は正しいような気がする。記憶があるということは可能性はある。全否定はしない。

「なるほどね」

橋本は頷いた。西野は微妙な表情を浮かべている。半信半疑のようだ。だが、完全に否定できないということは……どうなるのだろうか。橋本は混乱する。

しかし、よく考えれば証拠がない。記憶という信用性が低く、物質でないものだけで決めることは間違いだらうか。橋本は坂下に言った。

「それは微妙だな」

すると、坂下は真剣な表情で訊いた。

「微妙。つまり、否定はできないということか？」

微妙という言葉以外に答えがあるのか、と橋本は思った。迷宮に迷ってしまったかのように橋本は決断することができなくなる。

その時に、今まで何も言わずに考えていた西野の口が開いた。

「中川はどう思っただらうね」

「あの人は非協力的だから、答えないだらう」

そう言っつて、坂下は溜息をついた。そして続ける。

「怪しいよ、中川は」

彼の中での最有力容疑者は中川詩織のようだ。坂下に部屋を外から見つめられていたことに苛立っていたようだが、非協力的な態度を見ると、少し怪しいと思う。でも、当然のことかもしれない……。

橋本は迷宮の中で迷い続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5989f/>

蘇る心境

2010年12月24日02時02分発行